

バンドー神戸青少年科学館で投影されている、プラネタリウム番組「きみが住む星」を観に行ってきました。当初、山梨県立科学館に行かなければ観られなかったところを、神戸で投影されることになり、喜んでいた私でしたが、番組を観終った後、「この数十分のために、山梨に行き帰りしても惜しくない」と思えるほど心動かされたのでした。

主人公が日本に残した恋人にあてての便りが軸となっているのですが、その主人公が「・・・群青の成層圏の空を見た時、ぼくはこの星を好きだと思った」そして、そのわけは、きみが住んでいるから、と続くのですが、このきみが住んでいる、そして自分も共に住んでいるこの星が愛おしい、というのが深く伝わってくる映像と内容で、私は気が付けばずっと泣いていたのでした。

この番組では、池澤夏樹さんの小説からの引用と、この作品のために新たに作られた「便り」があるのですが、その新たに作られた「便り」が、池澤夏樹さんの魂をそのまま引き継いでいることを感じました。

海のくだりを語る「便り」には、プラネタリウムのドームいっぱい、海の生き物あふれる光景が映し出されるのも幸せな体験でした。まだ灼熱の地球に雨が降り注ぎ、その雨がいつか海となり、その海の記憶がたくさんの命たちに宿っていること。そんな映像と語りからも、この地球の命たちがひとつであることが伝わってきます。自然の繊細な何気ない映像も映し出され、それも、まぎれもない愛おしい命そのものであることが感じられます。その一方で、地球の影の部分にある日本列島が映り、人々の営みによる灯り（夜景）で浮かびあがっているシーンなど、ダイナミックでありながらとても詩的な映像もありました。「便り」の中で、遠くの星と自分とをつなぐ線をイメージする時、その星が遠くにあればあるほど、自分とこの星にあるすべてのものが、同じく「点」になる、その想いを伝えられるかもどかしい、という意味のくだりがありました。その「想い」はまっすぐ伝わりました。紛争があったり、様々なことのある地球ですが、それも含めみなすべて「ひとつ」である、「点」の中に私達はいるじゃないかという思いなどが浮かび・・・そんな気持ちが深く深く伝わってきました。

最後の便りもこの番組のオリジナルでした。原作では一ひねりしてある最後のくだりが、この番組では「直球」でした。それも私の胸に深く響き、「この便りが届くころには自分も帰るよ」、という旨の字幕が涙で霞んで見えなくらいでした。音楽も素晴らしく、終わったあと、「おはよう、おやすみ」のメロディーがずっと、心の中をリフレインしていました。この番組は字幕がとても有効に使ってあると感じました。ユニバーサルな意図のみだけではないものがありました。語られる内容を視覚で読み取ることで尚深い印象が残り、また、自分で考えるよすがにもなったのでした。本当に心から観てよかったと思える番組でした。